

余暇に関するキリスト教的一考察 —聖書とピューリタンを中心に—

Leisure from a Christian Perspective: A Study of the Bible and Puritans

金 玉泰 KIM, Oktae

● 西原大学校
Seowon University



余暇, キリスト教, 聖書, 安息 (日), ピューリタン

leisure, Christianity, the Bible, rest (Sabbath), Puritan

ABSTRACT

余暇に関する思想や実態は、古代から現代に至るまで歴史とその時代によって様々に変遷してきた。キリスト教の聖書に現れた余暇とは、神が6日間の創造使役を終えた後、7日目に安息（休息）したことに求めることができ、イエスも自ら模範を見せられた。また、旧約聖書には祝日や戦勝などに踊り、原始的なスポーツがあった。新約聖書には運動競技に関する多くの比喻が出ているが、これは各種遊びとスポーツが否定されないことを語っているといえる。ところで、宗教改革と共に起きたピューリタンには、合法的な基準によって余暇が成り立つことはあったが、余暇について功利的な態度によって概して否定的な姿を見せた。ピューリタンの余暇は、なるほど多様なゲームやスポーツ等を通じた肯定的である面もあったが、しかし教義的な制限などで全般的に不便であった。今日神が人間に与えた安息と余暇は、神の栄光のためによく行われなければならないであろう。

Attitudes toward leisure have gone through many changes from ancient times. Leisure in the Bible is best exemplified by God resting on the seventh day after the creation of the world. Jesus also set an example by resting. The Old Testament shows that there were dances and primitive sports during holidays or when celebrating victories. The New Testament also provides various metaphors relating to athletics. These demonstrate that play and sports are not denied in the Bible. Meanwhile, the Puritans, who emerged with the Reformation, had a generally negative attitude to leisure due to their utilitarian orientation, although they rested and participated in leisure activities. Leisure was generally inconvenient to Puritans in spite of its

positive aspects. Rest and leisure today, as gifts from God, should be enjoyed for the glory of God.

1. はじめに

現代の余暇問題の「余暇に対する罪意識」とは、よく余暇を楽しむ事をタブー視する実利主義的な態度から始まる。仕事をする事以外に、他のことをすることに対して感じる罪意識である。ある部類の人々は余暇を非生産的で、社会のために何の価値もなく、特権層の代表的な実例で見る傾向がある (Ryken, 1987: 56-57)。

ところで、このような余暇に対する罪悪感をキリスト教に求める傾向もある。もちろん、中世の暗黒時代と禁欲主義などはそうであるが、特に、16世紀に現れたピューリタンの日曜、すなわち、安息日のストイック的な性格がある。日曜の娯楽に反対し、礼拝と休息を主にすることを主張した。したがって、彼らには安息日としての余暇はあったが娯楽としての余暇はなく、祭りはあったが遊びはなかったと述べている (佐藤, 1988: 136)。肉体労働から休息という余暇の姿は整えているというが、自由と選択という余暇の本質とは距離が遠いというのである。

だが、ピューリタンは無条件に余暇を否定し反対したのだろうかという疑問がある。そこにはピューリタンの余暇の実態に関する誤解ないし無知によるものも相当部分含まれている。彼らは、今日常識的に知られているものより多くの余暇を持っていた。すなわち、彼らは、多様なスポーツや文化的なレクリエーションを楽しんで、舞踊も習った。彼らは、合法的な基準によって余暇を追求しようとし、余暇も過度に追求することができるというのも知っていた。また、身体的レクリエーション以上の知的で文化的な余暇を好んだ。

事実、後期近代社会に入りながら、余暇をこれ以上放置することができない状況が展開していた。ホイジンガ (J. Huizinga) は、彼の記念碑的な著書『ホモルーデンス (Homo Ludens)』を通じて、宗教と遊びとを対立するものと見なすよりも共通点がさらに多いという点を指摘し、ピー

パー (J. Pieper) は自身の神学的で哲学的な思考として余暇を具体化することによって、遊びと余暇とを教会外部の力と見なす立場をきっぱりと拒否した。

モルトマン (J. Moltmann) は、従来の神学に美的要素と楽しみとの主題がないがしろに扱われてきたことを指摘している。今はイエスの苦難と泣くことに続いて『イエスの笑い』を神学的として確立する時と主張した。また、コックス (H. Cox) によると、初代教会の礼拝で踊りを、中世のバカ祭行事で祭りと幻想の要素を新たに生かして、かわいた現代文化に活力を吹き込まなければならない。すなわち、熱烈な礼拝は慶祝行事になり、信仰は積極的な遊びになるように更新することが至急だというのである (Woo, 1999)。

1970年代から急速な経済成長と共に急速な教会の成長を経験した韓国の教会では、相変らず余暇をタブー視している側面があるが (Lee & Kwon, 2007)、キリスト教、特に、プロテスタント教会は、余暇を完全に許さない立場から出発して、宗教と遊びとの差異点よりも共通点に注目する中立的な立場を経て、今は余暇を神学的に具体化して信仰生活に引き込む積極的な立場を取っている。

特に、Lee & Kwon (2007) は、韓国の教会が東洋のエルサレムとして受け持った使命をよく果たそうと思うならば、今からでも余暇を教会の日常として生かすべきで、キリスト者は余暇を度外視した教会の誤りを繰り返さず、神が与えた才能を労働でのように余暇でも発揮することができるように努力しなければならないといった。それだけでなく、休息を取ることにおいて、罪悪感なしでゆっくり休むことを学ばなければならないといって、熱心に仕事を行えば休息する権利もあると主張した。

本研究では、先に歴史と時代によって変遷した余暇観、余暇思想を検討し、次に新旧約聖書に現れている安息 (日) を中心に余暇と遊び・スポー

ツなどの余暇について調べ、最後にキリスト教の歴史で今でも大きく影響を及ぼしているピューリタンたちの余暇思想と彼らの余暇実態を考察して、今日のキリスト教、キリスト教徒が取らなければならない望ましい余暇に対する指標を提示することを研究目的とする。

2. 余暇思想の変遷

余暇とそれに対する思想は、歴史と時代によって変遷してきた。古代ギリシャでの余暇は、少数の特権層に偏重されたことで、自由時間以上の自己修養や教育に焦点が合されており、人間の価値を追求することとして、立派な市民としての資格と関係した(熨斗, 1974: 38)。特にプラトン(Ryken, 1995: 85)は、幸福のために思索と瞑想・哲学・自己開発のための時間が必要であるが、このような時間がまさに余暇とあって、アリストテレス(Ryken, 1989: 78)は、「平和のために戦争を避けることができないように、余暇のために人間は仕事をする」とまで余暇優位的な余暇観を表明した。

ローマ時代にもギリシャと同じように余暇を開発して楽しんだが、知識と探求より法律と慣習が強調された。ギリシャ時代にエリートの文化的専有物であった余暇は、消費的な概念と政治的な手段と変遷した。さらに、一般大衆の大量娯楽物と、また、一部富裕層の贅沢材に変わって道徳的に墮落することになる。他の見方をすれば、今日の余暇相と類似の面を見せるといえよう(Kim, 2005)。特に、ローマでは身体的な活動がとても低俗になり、倫理的・ストイック的な立場からの批判を受けることになるが、セネカ(Seneca)は、肉体的であることは最小限の肯定にとどめ、狂乱的な余暇状況を排斥した。ただし、キケロ(Cicero)はプラトンの唯心論の世界を基本思想として貴族的であったが、農耕や身体的なレクリエーションとスポーツを生活の忠実と健康の確保という観点で認めようとした(篠田, 1975: 74-75)。

中世カトリックのもとでは、ローマ時代の誤っ

た余暇観に対する反発により、余暇に対する否定的な見解が支配的であった。カトリック教会は、何よりも生活の目的が来世を準備することと教え(Torkildsen, 1983: 164)、勤勉な労働と瞑想を重視した。古代の神学者であるテルトゥリアヌス(Tertullianus)は、ローマの祭りをすべて拒否した。西欧で最初に修道院をたてたセントオーガスティン(St. Augustine)も楽しみの追求に対して否定的な立場を見せた(Ryken, 1995: 88)。しかし、中世のカトリックが余暇に関してすべてを否定したわけではないようである。なぜなら、多くの公休日と祝日には、人々が日常の束縛から解放されて思う存分エネルギーを発散することもできたからである。いずれにせよ、中世の余暇は、集団的な余暇形態を見せたギリシャやローマ時代とは違って宗教的に個人中心的であり、労働は神聖で余暇は世俗的なことと見なすことによって、人間の本質をホモファバー(homo faber)と見たというのである。

ルネサンスの時から余暇活動が自我啓発と知的な欲求を充足させる教養増進のための手段として認識されながらも、封建貴族階級の高級文化が画的に発達した。これは封建貴族層の身分誇示効果と社会的承認獲得という意味を持つことになり、同時に上層の特権階級の余暇文化として開花することになった(Song & Lim, 2000)。また、ルネサンスはギリシャの身体訓練と道徳的・精神的修養が余暇生活にも強調された。したがって、この時代の余暇活動は主に自己啓発と知的な欲求充足のための手段と認識され、貴族および王朝の後援下に文学・ドラマ・音楽・美術・バレエなどの活動が推奨され、劇場およびオペラハウスの建設と共に教養的な余暇施設が増加したが、ホイジンガはこの時代を『遊びの黄金時代』と評価した。

中世末期に現れた宗教改革は、労働に宗教的意味を付与し、産業社会形成の精神的支柱になったが、新教倫理は労働を擁護し、労働の経済的利益保障を通じて個人の救援と他人に対する奉仕手段で労働が重視されて余暇が相対的に軽視された(Kim, 1998: 129-130)。新教徒達は贅沢で遊興

的な余暇を非難し、特に、ジュネーブのカルヴァレ主義者など（Calvinists）と英国のピューリタンたちは、そのような遊興的余暇を減らそうと努力した（佐藤，1988：22）。

宗教改革と20Cとの間の余暇に対する最も注目すべき発見は、功利主義（utilitarianism）の発展である（Ryken，1987：81）。英国の哲学者ベンサム（Bentham）は、幸福を効用（功利）と同じことと見なし、喜びを利益（所得）と同じことと見なした。また、ミル（Mill）は、価値は効用にかかったことといった。このような功利主義的精神は産業社会で一層広がった。工場が普及して都市が発達しながら、効用や有用性という概念が美しいとか人間性を豊かにするというなどの概念より、さらに重要な概念と認識された（Kim，2005）。そうしながら、自然に余暇は有用な概念の範疇に属することができなくなった。余暇は実用的な事柄の向こう側にあるというためである。

物質的な効用を持ってくることがだけが善良であるという功利主義的な価値観は、仕事だけに価値を付与して余暇は生産的なことでないと考える以上、余暇を享受することに対して否定的な認識を持つようになる。このような観点を持てば、余暇は仕事をもっと上手に行うための休息という意味を持つ。このような思想は、今日も Ryken（1987：82）が指摘した通り、個人的かつ公的な決定が有用性という基盤の上に立つ傾向がある。したがって、労働の倫理は繁盛したが余暇の倫理は貧弱になったと考えざるをえない。

現代は、十分に大衆余暇時代といえることができる。過去、少数特権層の余暇独占時代は崩れ、余暇が大衆化・大量化現象を見せている。特に、20C後半には大衆余暇現象がその絶頂を極めたといえるのに、当時、余暇の重要な特徴を見れば（Kando，1980：7）、生産性の向上は産業社会の自己矛盾を生むことになり、購買力の向上は余暇消費の比重を増大させ、熱狂的な反技術運動は労働と余暇観に深刻な変革を与えた。

Song & Lim（2000）によると、現代人の消費主義の内部には、富の獲得を通じた現世での成功の証拠の代わりに、余暇の中で自分たちの成功を

誇示しようと思うカルヴィニズム式思想を含んでいる。彼らの関心はどのように消費し、また楽しむかに転換され、たとえこれが資本主義社会の本質的現象としようもの、金銭万能主義のような非人間的現象を助長する結果を招いている。もはや過去プロテスタント倫理が内包している余暇使用の意味と価値は退潮し、生産的余暇の姿が消費主義と転換されて行くことによって、行き過ぎた物質主義と商業主義によって質的な余暇の機会は失われているのである。

また、産業社会で人生の速度が速くなり社会が複雑になりながら、一層余暇時間が減ると、余暇自体が高い満足を持つという効用材としての認識されるようになってきた。所得水準が向上し労働時間が縮小されながら、今は仕事のために余暇を持つのではなく、余暇時間をよく送るために仕事をするということと認識が変化した。さらに、職業で自身のアイデンティティを探すより、余暇活動を通じて人生のやりがいを探す人々が多くなった（Kim，2005）。

事実、今日、経済発展とともに所得と余暇時間の増大は、労働観と余暇観を混沌状態に陥るようにした。労働だけに価値を認め余暇は価値がないことと感じた価値観が変わり、余暇が目的で労働は手段という意識が順次広がっている。したがって、労働の神話が崩れて余暇万能主義になっているのである（Oh & Kim，2004：270）。

このような余暇に関する誤った認識は、Kang（2002：71-72）が指摘したように、今日余暇を感覚的な欲求解消の機会だけで考え、個人の自由だけを強調して、公益性と社会正義を無視した利己的な行為と表現されている。これは過去とは違って、大部分の人々が余暇の重要性を認めている現実を勘案する時、余暇概念の歪曲が決して個人的な次元に留まらず、誤った余暇欲求の表現を通じて健全な余暇を区分し選択する判断力と、自身の人生と条件とに合うように節制できる能力を弱体化させるだけでなく、彼が属した社会文化の発展と深い関係を持つことになるためである。

3. 聖書での余暇

キリスト教の經典の聖書は、旧約と新約、2冊から構成される。旧約はモーゼを中心にイスラエル民に与えられた神の約束であり、新約はキリストの福音を通じて与えられた神の約束である。その中には靈的なことがら以外に、今日人間が生きていくのに必要な色々な指針や原則があるが、特に、この章では余暇に関することを探索してみようと思う。

3.1 安息(休息)としての余暇

旧約聖書に現れた『安息日(Sabbath)』とは、神が創造の使役を6日間で終えた後の7日目に安息し、この日を祝福して聖別したことで始まっている。これは、創世記第1章に記録された特別な創造使役後に行った安息である。神は人間のように肉体があるわけではなく、その属性が時間と空間を超越する霊であるために、疲労を感じず、人間のような休息や安息を必要としない。それにもかかわらず、神が七番目の日に親しく模範を見せながら安息したことは、神自身のためというよりイスラエル子孫のためであり、さらに、アダムと彼の子孫の全人間が効率的に安息日を守る時、恩恵を受けて神の安息に入ってくるようにするためという(Bark, 2002: 54-59)。

それでは、神の安息は余暇に関してどのように語っているのか? Ryken (1989: 182-184)によると、それは、人間の仕事と貪欲に対する限界を明確にすることによって余暇を強調している。余暇は生産の必要から私たちを自由にし、代わりに、すでに作っておいたものを楽しむようにする。余暇は、生産と消費の世界で私たちをくくっている功利主義者などの主張から解放させる特性を持っている。

創造後、神の安息で推論できるもう一つの事実は、安息がデッド・タイムや怠惰とは異なるということである。そういう安息は喜びと満足という肯定的な特性を持っている。さらに、それは特に、自然と芸術と美に対する観相(contemplation)と関連している。神は創造使役を完成した後、

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは非常によかった」(創世記1:31)と言われた。これはもちろん、余暇の必要領域をいうと解釈可能であるが、少なくともそれは、余暇に関する観照的で審美的な面を認めているのである。さらに、科学技術の時代でも余暇は、人々が自然との接触を通じて新しくなる最高の方法として残るというのを注目しなければならない。

また、神の安息には気晴らしと再創造の特徴がある。出エジプト記31章17節には「これは、永遠に、わたしとイスラエル人との間のしるしである。それは主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれたからである」と記録されている。ここで、神の安息は、活動でない気晴らしの機能によって定義され、また、その中で人間の休息と余暇のための神のモデルを見ることができると言える。

さらに、仕事から安息した神のモデルは、十戒で人間のためとなる命令になる。出エジプト記20章11節は第4戒である。六日の間、天地を創造した後七番目の日に安息した神の安息に参加するようにすることとして、すべての人に拘束力を持った第4戒がイスラエル子孫に安息日を偉大に守ることを命じた。

Ryken (1987: 184-185)によると、第4戒が提案する他方の事柄は、人間生活のための神の模範は、仕事と安息の間のリズムという。仕事と余暇は、どちらもそれ自体だけでは完全でないが、この二つは相互補完関係にある。第4戒は、安息の日(a day of rest)を規定しながら、同時に私たちに仕事をするを命じている。ここに余暇に関するキリスト教的な観点への本質的な調和を作り出す仕事と遊びとの統合があるのである。

旧約聖書で神が安息の模範を見せたように、新約聖書でイエスもたびたび安息の模範を見せている。イエスは、非常に忙しい生涯を通じても休息する時間を忘れなかったが、Ryken (1987: 185-186)はマルコによる福音書6章45-47節等を例にあげている。

マルコによる福音書には、イエスが退いて祈っ

たことに対して3度も記録されているのに、皆が一種の危機と関連しており、イエスが生涯の間、数多くの困難と苦痛にあいながらも勝ち抜くことができたのは、まさにこの祈りの力のためというのである（チェチャウォン編、1992：862）。祈りを捧げるというのはもちろん霊的な面が重視されるが、心身の休息と気晴らしなどの余暇的な意味も大きいと言える。これに類似した場面はルカによる福音書（6：12、9：28）でも見せている。また、イエスはマルコによる福音書6章31節で、「さあ、あなたがただけで、寂しい所へ行って、しばらく休みなさい」と言ったことを見ることができるよう、弟子たちにも休息に対する同じ生き方を定めている。

福音書でのこのような一節は、余暇を理解するために大変重要である。この一節は、イエスが絶えず福音を伝えた生活の中でも、余暇を制限しないているということを行っている。人性を持つイエスは、自身の任務を遂行しながら祈りとともに休息できる時間を必要としたように（マルコによる福音書1：35）、休む暇もなく伝導活動に疲れた弟子たちにも休息の必要性を教えたのである。

そのような点で最も印象的な事件で、マリアとマルタ姉妹に対する挿話がある（ルカによる福音書10：38-42）。この二姉妹は、互いに対照的なスタイルを見せたが、マルタは活動的であり食べ物の準備に心が忙しかった。しかし、イエスは「いろいろなことを心配している」彼女の心を叱った。かえって、「良い方を選びなさい」とマルタに命じている。反対に、少なくとも、しばらく間であるが、仕事をする強迫感から抜け出して休息を取ったマリアは叱らなかったのである。

3.2 聖書での遊びとスポーツ

聖書の背景になっているヘブライ人には、ギリシャ人やローマ人のように派手なゲームやスポーツはなかった。ただし、彼らは宗教的な祝日や社会的な機会に、個人対抗で力と技とを争ったり踊ったりした。宗教的な大祝祭は、最も感動的な教育的作用であった。舞踊は宗教儀式の一部門を占め、聖典のバルコニーは時々舞踊のための舞台

で利用された。感謝祭の時には、感謝の舞踊のためにぶどう園に特別な場所が準備された。

古代ヘブライ人は強い体力を賛嘆した。士師記13章7-17節には、良く知られている大力を持って生まれた彼らの英雄サムソンの話がある。そして、ダビデ、ヨナタン、アビシャイ、エリエゼル、ヨアブ、アシェルなどの勇士があり、偉大な戦争の指導者のサウルは力強い人を自身の周囲に集めた。しかし、聖書では動物的な力より霊的な力がこれら力強い人々の力の根源であったと強調されている。

水泳は、子供に教えなければならない三種類の必須項目の中の一つであった。ヨナタンは、ヨルダン川を泳いで渡ることによって自身を追跡する敵を避けることができた。イザヤ25章11節、「泳ぐ者が泳ごうとして手を伸ばすように…」によれば、ヘブライ人はカエル泳ぎ（平泳ぎ）をしたという事実を察することができる。

宗教舞踊は時代を問わず、ヘブライ民族の壮厳で幻想的な魂の表現であった。彼らは、エホバを歌で賛美することが適当ならば、舞踊をすることも、また、適切な行為と考えた。男たちまでもエホバを賛美する楽しい踊りに参加した。ダビデは契約の箱（民数記10：35）の前で踊った。そして、旧約聖書の詩篇で自分の民に、「踊りをもって、御名を賛美せよ」（詩篇149：3）と勧めた。

このような舞踊は、金の子牛の前で、また、紅海を渡った時行われた（出エジプト記15：19-20、32：19）。感謝祭のような大きな祝祭には、その意識の中で踊りが含まれた。ヘブライ人は、当時の他の民族のように秋の収穫の豊かなことと戦争の勝利を踊ることで祝った。サムエル記上18章6節と21章11節には、ダビデがペリシテ人のゴリヤテを倒した時、これを祝うために女たちがタンバリンと楽器を持って歌い踊ったと記録している。

新約聖書において、イエスは親しく最高の理想的な人間像の実現者で、彼においては身体と精神が完全に調和をなしている（Brink & Smith, 1914：89）。イエスは健全な屋外の生活に関心を持っており禁欲主義者ではなかった。彼は交友を

愛し社交的な集会を楽しんだ。Graves (1925 : 166-167) によると、「…イエスは特殊な物質の楽しみや社交生活を本来不道徳なことと取り扱わなかった。…彼は特に要求したり禁止したりするのはなく、全てのものは必要にかかっている。…彼は現世の楽しみと休養を否定しないで…」というのである。

Jokl (1977 : 56) によると、使徒パウロは、彼の生涯を通じてスポーツに対する情熱を持っていた。彼が小アジアとギリシャを通じて伝道旅行をする間、運動競技を観戦し、それだけでなく、その運動競技に深く没頭することも行った。また、新約聖書の中、彼の書信で、運動競技に対する多くの比喩を挙げているのに、彼は魂が運動選手のように訓練されなければならないと考えた。

新約聖書でパウロは、運動競技に対する多くの例をあげており、そのなかのいくつかを挙げれば、テモテへの手紙二章5節、「競技をするときは、規定に従って競技をしなければ榮冠を得ることはできません」といっている。ここで話す『競技』は、古代ギリシャ・ローマで4年ごとに開かれたオリンピック競技を示すことであり、『規定』は、オリンピック競技の細部的な規則を示すと同時に、競技に出場するために6ヶ月間練習することを誓約することを示す(チュチャウオン編, 1993 : 1132)。

コリントの信徒への手紙一9章24節、「競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい」といっているが、これは、聖徒たちが榮光の冠を得るためには、自分のように自由および権利の放棄と節制が要請されるという事実を運動競技者の姿を比喩で勧めているのである。

コリントの信徒への手紙一9章26節、「私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしてはしません」では、二つの競技、すなわち、競走選手とボクシング選手の行動をパウロが伝えようとする要点が明らかに提示されているのに、競走選手が決勝点に

向かって、自身のラインから抜け出さずに走らなければならないように、パウロ自身も方向なしで走っていないという。また、ボクシング選手も相手を打ってなぎ倒してこそ勝利を得ることになるように、パウロ自身も、明らかな目標意識を持って福音の道を行っているというのである(チュチャウオン編, 1993 : 165)。

その他にも、テモテへの手紙二章7-8節、フィリピの信徒への手紙3章12-14節、テモテへの手紙一4章7-8節、フィリピの信徒への手紙3章13-14節、エフェソの信徒への手紙6章12-13節などで、運動競技に関して記録しているところ、これは、運動競技をはじめ各種遊びやスポーツが軽視されたり否定されず容認され、一面では、推奨されることもなかったかと推測ができる。

4. ピューリタンと余暇

イギリスで起きたピューリタンは、彼らの信仰と道徳的な範疇を検討する時、健全な余暇活動も持ったことが明らかである。しかし、日曜には娯楽を反対し、礼拝と休息を主にすることを主張した。だが、ピューリタンの余暇については、その間誤解ないし無知によることも相当部分含まれているようである。本節では彼らの余暇思想と余暇の実態を考察する。

4.1 ピューリタンの余暇思想

ピューリタンは労働を尊重し、怠惰を嫌悪し、カトリックにあつて汚名された活動は何でも排除しようと思ひ、精神的な緊張と外形的な訓練を通じて道徳を増進させるために、人間のほとんどの自然的欲望を禁止させた。熱心に仕事をしたピューリタンたちは、スポーツなどに熱狂する金持ちと余暇が好きな貴族に怒りを感じた。外面的に、ピューリタンたちは上流階級のモラルハザードを攻撃した。内面的には彼らの経済的・社会的不満を宗教的に正当化させるために、富の享受を不法視したのである。Dulles (Van Dalen and Bennett, 1971 : 147) によると、これら二つの要素、すなわち、精神的改革と経済的嫉妬は、互いに絡ま

ていて、決して分離することができず、この二つは、すべて16世紀と17世紀に存続し、後代にもピューリタン精神が現れる時には、いつも存在してきたのである。

しかし、ピューリタンたちは、衣食住と軍事的保護のために共同で参加するものによって、社会・休養的経験をする必要を間接的に充足させた。要するに、初期ピューリタンのレクリエーションは、彼らの経済的必要に既応する巧妙に裁断(cut)した。結局、真の信仰に向かったピューリタンたちの教義的な側面と移住したアメリカ広野の苛酷な環境によって、彼らは怠惰に反対し労働を重視せざるを得ず、遊びは、しなくても良いことと、排撃しなければならぬはずである等、余暇とは距離の遠い雰囲気支配することになったのである。

だが、Wagner (1982)によると、ある説教者は、レクリエーションについてキリスト教徒たちは、「神が我ら自らを新しくすることために自由を許したので、自由に、そして、神に感謝することでレクリエーションを楽しまなければならない」といい(Foster, 1971: 106), W. Burkitt (Wagner, 1982: 41)は、「神は必要で適切な娯楽やレクリエーションを私たちに与えた。賢明で立派な人はからだを新しくする、健全で簡単ながら創造的で適切なレクリエーションを選択できる信仰を持った」と言った。

ピューリタンたちの安息日は、やはり余暇の次元で成り立った。それは、貪欲な衝動を制限することであった。事実、Ames (1968: 299)は、これを日曜にする適切な活動と不適切な活動で区別し制限した。不適切な活動は、『自身の富と有益のためのことなど』であった。Bownde (Dennison, 1983: 39)は、世の中のことで日曜が邪魔されることになるならば、神の事はすることができなくなると主張した。

ピューリタンたちは、『合法的』でいう基準によって余暇を追求しようとした。例えば、Perkins (1965: 114)は、余暇を判断するための四種類の宗教的で道徳的な原理を次の通り挙げている。(1)レクリエーションは、『最も良い評判』を受

けなければならない。(2)レクリエーションは、『我ら自らと他の人に有益でなければならず、神の栄光を現わすということできなければならない。』

(3)レクリエーションの目的は、『私たちのからだを新しくすることできなければならない。』

(4)レクリエーションは、節制し時間を節約するべきで愛情がなければならぬ。このような基準は、なるほど、合法的である面があるが、この基準の長所は、余暇を追求するのに宗教的な基準を適用するということである。

余暇の道徳性に対する同じ関心は、ピューリタンが一部のレクリエーションを禁止することの基礎になった。例えば、彼らは熊をからかうことや闘鶏のようなことには反対したが、それは動物に残酷で人を凶悪にするためである。彼らは飲み屋でするスポーツに反対したが、そのようなところでは、常に、酒に酔っ払っていたり放蕩な行動があったりするためである。そして、彼らは演劇と虚構的な小説(romances)に反対したが、そういうことなどの中に不道徳な行動が現れたためである(Ryken, 1987: 105-106)。

さらに、ピューリタンたちは、余暇自体を肯定した面もあると同時に、余暇が過度に追求されることができるとも知っていた。彼らはレクリエーションに要する時間だけでなくそこに消費されるお金も節制することを主張した。例えば、I. Mather (Wagner, 1982: 61)は、「キリスト教徒がレクリエーションをするのは、非常に正当で、一面相当な義務でもある。しかし、いつもカードや賭博をするばくちうちのようにあるレクリエーションにとっても多くの時間を浪費するのは、卑劣な罪を犯すことだ」と指摘し、C. Mather (Wagner, 1982: 61)も、「適当なレクリエーションは、…より健全で有用したのだ」と説教し警告をした。

Ryken (1987: 108-110)が指摘した通り、ピューリタンたちは、余暇についても法を優先視した。すなわち、ピューリタンたちの余暇に関する態度において、最も不満に思えるのは、余暇活動に関する規則がとて多いというのである。前で述べたように、ピューリタンたちは、道徳的で霊的な

基準に合わせて余暇活動をしようとした。しかし、そういう数多くの基準は、時々ピューリタンたちが余暇について理論的に認めたのを傷付ける結果を招いた。

例をあげれば、Baxter (Wagner, 1982 : 48-49) は、キリスト教徒が余暇を持つ時、守らなければならない十八種類の制限目録を提出したが、その主要内容は概して次のようなことであった。すなわち、余暇は究極的に神に仕え、一般的な召命と義務を遂行するために役立つなければならない。レクリエーションが不敬で猥褻であってはならず、他の人に害を与えてもならない。スポーツに対して怠惰が増加する場合にもスポーツは合法的でない。さらに、もし、ある人がより良い余暇を選択できることにもかかわらず、適切でなく有益でもない余暇を選択するならば、それは罪悪である。

ピューリタンたちは、余暇に対して功利的な態度を見せた。以前に考察したように、ピューリタンたちは、原則的に余暇に対して反対しなかった。余暇に関する彼らの防御は、本質的に功利的なものであった。余暇は、仕事を可能にさせるから良いことであった。それは余暇自体のために、または、生活の祭りとして、または、人間の心を広げるがゆえに価値があるとは見なされなかった。例をあげれば、あるピューリタンは、「レクリエーションは、休息のためのものでなく労働のためのもので、人間は労働をするのに、さらに適合することになるように余暇を利用した」と書いた。また、レクリエーションは、「ただし、私たちが労働を継続できるように助けること」と付け加えた (Ryken, 1987 : 109-110)。

このような功利主義的な余暇倫理は、ピューリタンたちが仕事の意義を過度に強調した結果であった。もし、仕事をするものが時間を最も善用するものならば、余暇は時間を乱用することになる。Baxter (Sasek, 1961 : 114) は、『娯楽』を『時間浪費』と取り扱い、その単語さえも『恥かしいこと』と拒否した。そうして、彼は次の通り忠告した。すなわち、「時間に対して大きく尊重し、日毎に時間を無駄に過ごさないようにより一

層注意しなさい。もし、無駄になったレクリエーションや身なり、祝宴、むだな話、無益な友人、または、睡眠などが私たちの時間を奪うために誘惑するならば、警戒を強化しなければならないだろう。』

4.2 ピューリタンの余暇実態

ピューリタンの余暇の実態において、まず肯定的な面から見ると、ピューリタンたちも教義的な面や環境的な面などの難しい中でも、自ら多様なスポーツやレクリエーションを楽しんだという事実である。合法的な基準によって余暇をしようとし、余暇の耽溺についても注意を払った者のなどの余暇に対する肯定的な面が多かったというのが明らかである。

宗教改革者ルター (M. Luther) やツウイングリ (U. Zwingli) 等は、体育訓練を推奨した。ただし、認可した活動といっても簡単なレクリエーション時間に自由な遊びが許されたのである。ツウイングリは教育課程に多様な体育活動を含めようと提案したが、走り・跳び・投げ、そしてレスリングになった彼のプログラムは、古代ギリシャのパライストラ (palaestra) 課程と似ていた (Van Dalen & Bennett, 1971 : 151)。

アメリカへの初期移住者たちは、共同労働で若干制限的ではあるが、レクリエーションの機会を持つことになった。納屋と家屋を建造すること、およびとうもろこしの皮をはがすこと、丸太を転がすこと、そして耕作大会などは、彼らにあって身体的な能力を争うというものであった。仕事を終えた後、祭りを行って非常に楽しく遊ぶのは、舞踊とスポーツに自発的に参加する機会になった。

新大陸の森と海は、獲物と魚が豊富であり、すべての移住民に所得と楽しみを与えた。そうして、移住民たちはハンティングを一つのスポーツとして持続した。経済的なことだけでなく社会的・レクリエーション的性格を持つ団体狩猟は、初期にも祭りの場合に行われた。18世紀始めには、釣りも一つのスポーツになった。1732年には、全面的にスポーツと社交の中心になった二つ

の釣りクラブがシュイルキル (Schuylkill) 川辺で組織されたのである (Van Dalen & Bennett, 1971 : 153)。

Wagner (1982) によると、ピューリタンたちは、ハンティング、釣り、ボーリング、読書、音楽鑑賞、水泳、スケート、アーチェリーなどのような多様なスポーツ・レクリエーションを楽しんだ。バージニアの聖公会信者達は、スポーツやゲームを罪悪と見ないために、彼らは何の罪悪感も感じないで多様な形態の娯楽を楽しむことができた。彼らは慈善市 (fairs) を開き競馬と闘鶏に没頭し、キツネ狩猟は彼らの胸に大切な記憶に残った (Van Dalen & Bennett, 1971 : 154)。

しかし、このようなピューリタンたちの余暇に対する肯定的である面があることにもかかわらず、全般的な状況は不満そうな者も少なくなかった。例えば、ニューイングランド法は、すべての種類のゲームと歌と踊りを探すように警察に指示し、さらに、そういうことが個人の家で起きた時にも『無秩序な集い』を報告するように指示した。ボストンでは、綱渡り曲芸が村の人々を怠けるようにしたり時間を浪費するようにしたりするという理由で拒否された。これは、貴重な時間をたくさん浪費するシャッフル・ボード (shuffle board) と呼ばれるゲームを禁止したコネチカット (Connecticut) 法と似ているといえる。そういうピューリタンの決定に対する一般的な傾向は、余暇を悪いことと判断するようにし、乱用の恐れがある余暇活動は早く禁止させた。

さらに、ピューリタンは、一部のレクリエーションを禁止する法案を通過させた。ジュネーブでカルヴァレと彼のピューリタン追従者達は、ほとんど200種類に達する娯楽を規制する方法を通過させた。イギリスでは、エドワード6世の在任期間の間、宗教改革者たちは、舞踊を禁止させ、すべての五月祭柱を切ってしまうように決めた。Vuillier (Van Dalen & Bennett, 1971 : 150) は、「宗教改革の潮流が急流のように現れて、さらに、単純な娯楽さえ荒らしてしまった時、メリースコットランドはしばらく残忍で重大な場所に変わった。…」と言った。

スポーツ・ゲーム、そして舞踊を禁じる数多くの法令もニューイングランドに登場し、初期のバージニアには、あたかもピューリタンの法律と同じ厳格な法律がたくさんあった。マサチューセッツでは、飲み屋や結婚式の場合、舞踊が出来ないようになり、治安判事は少年たちがボストン道路でサッカーをできないようにした。1713年、ニューヨークとアルバニーの少年たちが雪に覆われた丘をソリで滑降し、公安の邪魔をして両親に恥と不名誉をさせたと言明するようさせ、警察は、彼らのソリを押収してこなごなにしてしまったというのである。

しかし、これは、原則的にレクリエーションを反対するというのではなかった。ピューリタンは、日曜に行くすべてのスポーツを反対し、平日にできるスポーツを定めておいた。彼らが日曜に運動を拒否するのは、日曜という一日は全く礼拝のような霊的な活動に献身しなければならず、一週間の世の中のことを休まなければならないという考えから始まったのである (佐藤, 1988 : 136-140)。

ニューイングランドの人々は、実用目的で提供される数多くの非公式的な体育機関を抑圧しなかった。組織的なハンティングは、食べ物を用意する実用的な手段としてだけでなく、レクリエーション活動として認められた。公式的な休日は、より形式的な体育を遂行する契機となった。プリマスでの最初のサンクスギビングデーは、単に、宗教儀式だけに捧げられた一日でなく、実に、それは一週間の祭りレクリエーションであった。軍事訓練日は、特に重要な行事であった。1645年、マサチューセッツ法廷は、10～16才のすべての少年達は、弓と矢、小銃、そして砲 (half pieces) の訓練を受けなければならないと命じた。村の公有地は、訓練場であり共同体の運動場であった。1639年、約1,000人が訓練日にボストン公有地で運動をした (Van Dalen & Bennett, 1971 : 150)。

ピューリタンが拒否したことは、道徳的に問題があるスポーツであった。ここには、運に任せるゲームや賭博、熊をからかうこと、競馬、飲み屋

の中やその近所でするボーリングなどがある。現代の基準として見れば、彼らが禁止したこと、例えば、シャッフル・ボードのようなものを禁止したことは、たいしたことでないように見える (Kaplan, 1960 : 151)。特に、ピューリタンはゲーム、怠惰、そして酒場の中やその周辺で起きる浮かれた騒ぎに対して厳格であった。

また、余暇に対しては教義的な制限があった。すなわち、カトリックの特殊な祝日を守ることができないように禁じたのである。中世の日曜と祝日には、ミサを捧げた後、ゲーム・スポーツ・舞踊・娯楽などに参加した。1647年、ピューリタン議会で、クリスマスとその他の祝日を全面廃止させたのである。アメリカのニューイングランドに居住してきたピューリタンたちも、ヨーロッパのピューリタンたちのようにそういうすべての祝日を守らないようにし、「労働や祭り、または、その他のどんな方式でもそれ(クリスマス)を守る人は、誰でも、5シリングの罰金を払わなければならない」とした (Van Dalen & Bennett, 1971 : 149)。

ピューリタンたちは、道徳的で霊的な基準によって、余暇に対しての様々な法と規則を作って制限したことは、余暇について否定的な面といえるが、これは、彼らがカトリックの教義に反対し、より確実な宗教改革を主張し、また、彼らが移住した新大陸の苛酷な環境による結果と言える。

5. むすび

今までのキリスト教は、人間の現実的な慰安と歓喜の要素を抑制し、余暇に対する罪意識を持つようにする原因を提供した側面があったことは否めない。キリスト教の神学でも、人間をホモファーマベル (Homo faber) と見て、その生の意味を奉仕・有用・目的の中にあるという側面もないわけではない。そうして、「仕事をしたくなければ食べることもするな」、すなわち「君自身を有用するようにさせることができないならば、使い道のない存在になってしまうだろう」という格率が通

用した。絶えず、自身の有用性に対して実存的に悩まなければならない瞬間、生の危機に直面し、このような神学的観点では、神さえも『仕事をする神』(Deus faber) になってしまう (Bark, 2000)。

しかし、余暇に対する神学的な基礎の中の一つは、神が創造の秩序の中に植えた安息の原理にある。労働から休息を取るのには、人間の基本要素として聖書で語っているのである。聖書で神が人々に仕事を召命として与えたように安息も与えた。安息とは、余暇のための必須なことと同時に余暇の一つの要因である。それで、安息に対する聖書的な原理は、余暇が生じることの存する余地を提供しているといえる。また、聖書は、余暇に対する一般的な理論的説明と余暇を追求する方法について提示している。本稿では扱わなかったが、聖書は、喜びと楽しみに対する正当性を与え、また、そこには多くの祝いと祭りがあり、遊びと舞踊があり、色々なスポーツが比喩にあって登場する。

今日、労働週5日制と大衆余暇時代を迎え、その間キリスト教を余暇と遊びに結びつけようとする試みが多様に展開されてきた。コックスは、今日の教会共同体が、ダビデが昔、箱 (ark) を移す際に、その前で踊ったように、中世紀のバカ祭での祭りと幻想の要素をまた考察して、干からびた現代文化に活力素を吹き込まなければならないとい主張した。これは、ある意味で、礼拝は慶祝行事になり、信仰は積極的な遊びになるように更新することが至急だという解釈も可能である (Bark, 2000)。

それでは、現代において、望ましいキリスト教的な余暇はどのようなべきか。まず、コリントの信徒への手紙一10章31節の「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の榮光を現わすためにしなさい」ということを考えることができる。これは、使徒パウロが提示した仕事の倫理であるが、余暇の倫理にもそのまま適用できるだろう。余暇とは無責任な自己没入行為や放縦、または、怠けるのではなく、人生の召命と創造の命令をあたえた神の前で責任をとり、そ

の目的に献身する態度を持つことである。

また、Ryken (1987: 207-229) が言ったように、道徳的な選択の舞台としての余暇、美しい余暇、余暇に対する個人および社会的な責任、余暇に対する管理者の思想、余暇における中庸と均衡などを理解して実践する態度が必要であろう。人は、労働のみを行って休む方法が分からなかったり、遊ぶばかりで仕事を思わなかったりしてはならない。なぜ、人は休息のための余暇が必要なのだろうか。神が人間を創造される時、休息が必要な存在として創造し、イエスも休息の必要性を知り、弟子達に命令されたためである。したがって、正当な余暇と休息を取ることにおいて、罪意識、罪悪感を持つ必要はないのである。

参考文献

- Ames, W.(1968). *The Marrow of Theology*, ed. John D. Eusden. Boston: Pilgrim.
- Bark, J.G.(2000). 現代余暇文化の疎外と余暇神学の確立に関する小考. 韓国キリスト教研究所世界神学, 151-177.
- Bark, H.S.(2002). 安息日と聖日. クリスチャン・ダイジェスト.
- Brink, B.D. & Smith, P.(1914). *Athletes of the Bible*. New York: Associated Press.
- Dennison, J. T.(1983). *The Market Day of the Soul: The Puritan Doctrine of the Sabbath in England*. N. Y.: University Press of America.
- Foster, S.(1971). *Their Solitary Way: The Puritan Social Ethic in the First Century of Settlement in New England*. New Haven: Yale University Press.
- Graves, F.(1925). *What Did Jesus Teach?* New York: The Macmillan Co.
- Jokl, E.(1977). "The Genius of St. Paul", *History of Physical Education and Sports*. Tokyo: Kodansha.
- Kando, T.(1980). *Leisure and Popular Culture in Transition*. St. Louis : The C. V. Mosby Co.
- Kang, B.H.(2002). 余暇論とレクリエーションの理解. ソウル：ポギョン文化社.
- Kim, G.D.(1998). 余暇と現代社会. ソウル：白山出版社.
- Kim, O.T.(2002). キリスト教安息日と余暇. 韓国体育哲学会誌, 10 (2), 31-46.
- Kim, O.T.(2004). 清教徒の余暇に対する功過. 韓国体育哲学会誌, 12 (1), 1-23.
- Kim, O.T.(2006). 現代余暇に対する倫理的考察. 韓国体育哲学会誌, 14 (4), 131-151.
- Kim, S.W.(2005). 余暇観の歴史的変遷と改革主義余暇観. 信仰と学問, 51-89.
- Lee, W.G. & Gwen, H.J.(2007). キリスト教観点の余暇概念研究にともなう新しい教会文化形成方案研究. 国際観光研究 第4권 제1호, 79-101.
- Lim, S.B.(2010). 21世紀文化とキリスト教. ソウル：長老会神学大学校出版部.
- 熨斗隆文(1974). 現代の餘暇. 東京：日本經濟新聞社.
- Oh, S.H. & Kim, D.W.(2004). 韓国の余暇文化. ソウル：一新社.
- Perkins, W.(1965). *A Treatise of the Vocations or Callings of Man, in Puritan Political Ideas, 1558-1794*, ed. Edmund S. Morgan. Indianapolis: Bobbs-Merrill.
- Ryken, L.(1987). *Work & Leisure in Christian Perspective*, Inter-Varsity Press.
- Ryken, L.(1995). *Redeeming the Time: A Christian Approach to Work & Leisure*. Baker Books.
- 佐藤敏夫(1988). レジャーの神学. 東京：新光出版社.
- Song, U.J. & Lim, S.W.(2000). プロテスタント倫理と余暇の関係. 韓国レジャースポーツ学会誌, 101-117.
- 篠田基行(1975). レクリエーション哲学. 東京：逍遙書院.
- チェチャウオン編(1993). グランド総合注釈 (12). ソウル：聖書教材刊行社.
- チェチャウオン編(1993). グランド総合注釈 (15). ソウル：聖書教材刊行社.
- Torkildsen, G.(1983). *Leisure and Recreation Management*. London: E. & F. N. Spon.
- Van Dalen, D. B. & B. L. Bennett(1971). *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative(second edition)*. Englewood Cliffs N. J.: Prentice-Hall, Inc.
- Wagner, H.(1982). *Puritan Attitudes Towards Recreation in Early Seventeenth-Century America*. Frankfurt: Verlag Peter Lang.
- Woo, S.T.(1999). キリスト教徒の望ましい余暇文化. キリスト教大韓聖潔教会活天, 75-79.